

ALS新薬 進行抑制と延命に効果
両方に有効性「世界初」
 貢献の徳大教授ら 都内で会見

新薬「ロゼバラミン」について説明する
 梶龍児特任教授(左)と和泉唯信教授(東京都内)



筋萎縮性側索硬化症(ALS)の新薬「ロゼバラミン」の開発の中心を担った徳島大学大学院医歯薬学研究所の梶龍児特任教授(臨床神経学)と和泉唯信教授(老年神経学)らが18日、都内で会見を開いた。新薬には進行抑制効果と延命効果が認められるとし「両方に有

効性が認められた薬は世界で初めて」と意義を強調した。現在、ALSの治療薬として国に承認されているのは、平均余命を約90日延長する内服薬と症状の進行を抑制する点滴剤の2種類。和泉教授らによると、発症から1年以内の患者に対

するロゼバラミンの進行抑制効果は、既に徳島大病院が発表している。延命効果については「2017年11月から23年8月末まで行った治験の解析で、16週間先に薬を投与した患者が、その後投与した患者に比べて約500日の延命効果があった」と述べた。

ロゼバラミンは徳島大病院の治験データを踏まえ、製薬大手エーザイが国に薬事申請を行い、承認が了承されている。ALSは脳からの命令を筋肉に伝える運動神経細胞が侵される難治性の神経疾患。発症すると全身の筋力が低下し、やがて呼吸困難に陥る。3〜5年で、人工呼吸器を装着するか死亡するケースが多い。

(佐藤聡美)